

## 「牛も人も幸せな牧場」はじめての一步

神奈川県立中央農業高等学校  
畜産科学科 1年

伊藤 野晴

農業高校に入学する前に私が持っていた夢は、

「牛が幸せに生き、さらに人も幸せに暮らす牧場」

を拓くことです。その時私の頭にあったのは“アルプスの少女ハイジ”の山羊達のように、牛が山の草を食べのびのびと過ごし、山を歩きまわる姿でした。そこで私は牛の乳を搾りながら、昼には山を歩きまわって草花を摘み、川で泳ぎ、草の上で昼寝をします。それからおいしい牛の乳を飲み、チーズもつくります。町の人達もたくさん遊びに来て、日々の疲れを癒していきます。

「なんて素敵なんだろう！」

この思いはいつも心の中にありました。

農業高校に入学し、私は牛を扱う酪農部に入りました。入学してまず思ったことは、自分の夢の牧場のイメージと今習っている酪農（今の日本の酪農の主流）があまりにかけはなれているということです。酪農部でも牛はつなぎ飼いのストール型、エサは外国から輸入した乾草に濃厚飼料。牛は山を歩きまわるところかスタンションにつながれて、1日中立っているか寝ているか。それなのに、大量のエネルギーの高いエサを食べているのです。今の日本の酪農のほとんどがこの飼育方法なのに、夢の牧場なんて無理かも・・・と思うことも何度もありました。しかし心のどこかで

「こんなやり方はおかしい」

と思う気持ちもありました。そして私のその気持ちを支えてくれた2冊の本がありました。北海道旭川市で山地酪農をする齊藤晶さんが書かれた「牛が拓く牧場」、そしてその齊藤牧場の写真集「いのちの輝き感じるかい」です。それらの本の中には私の夢の牧場が実在していました。

齊藤牧場は牛ができることは全て牛に任せ、できないことだけ人が手伝って拓いた牧場です。（これを蹄耕法といいます。）牛は、木がたくさん生えている山の上の草原を自由に歩きまわり、お腹いっぱい草を食べ、寝、しかもうれしい時はスキップまでするというのです。牛がスキップをする！そんなの見たことありますか？私はこの牧場に行ってみたくなりました。

中学3年の夏休みに1度齊藤牧場を訪ね、晶さんにお会いすることができました。目の前の齊藤牧場は、昔は岩だらけの山だったとは信じられない位、青々と草が生え、とても美しく生命力に満ちあふれていました。その中に1本不思議な倒木がありました。倒れても、上へ上へと枝を伸ばし、青々とした葉をたくさん生やしていました。苔におお

われた幹の途中から、若い白樺がずっと生えていました。(昔、鳥がそこに種を落としたのでしょうか?) 齊藤牧場を代表するかのようその倒木は、全身を緑に包まれ、大きな大きな生命力が湧き出ていました。あまりに牧場が大きいのでその日は牛の姿をみることはできませんでしたが、1度すごい声を聞きました。

「ヴオォ〜。」

この世のものとは思えない程、衝撃的な声でした。後でそれは雄牛の声だと知りました。そして晶さんは、

「来年の夏休みにまたおいで。」

と言ってくれました。

ゆっくりと時は過ぎ、待ちにまった夏休みがやってきました。私は齊藤さんに連絡を取り、2週間程研修させて頂くことになりました。8月1日の夜発の寝台列車に乗って、1人で北海道にむかいました。上野駅で母に見送られ分かれた時は、さみしさと不安が先走っていましたが、着いてみると、とても楽しい日々が待っていました。実は、この齊藤牧場に来る前に、学校の紹介で県内唯一の観光牧場で4泊5日の研修をさせて頂きました。(そこは、一般の人が普段なかなか入ることができない牛舎を自由に開放していて、子ども達が家畜達とたっぶりふれ合えるすばらしい牧場でした。しかしそこもストール方式で、牛は乳房炎がとても多く、また爪がとても長くて不自然だったのが印象に残っています。) 朝は3時半に起き、休憩以外はずっと働き詰めだったので、牧場とはそういうもので齊藤牧場でも似た感じだろうと思っていました。しかし、齊藤牧場の研修で初めに驚いたのは、時間がゆったりと進むことでした。朝は5時に起き、仕事は山の上からの牛追いでスタートします。私が研修させて頂いた8月は、時期的に冬に向けての乾草ロールづくりがあり、昼も忙しかったのですが、時には研修生の人がドラム缶を拾ってきて簡単なピザ釜をつくり、みんなでピザをつくって食べるような余裕がありました。そして私は牛の乳を搾り、山を歩き、川で泳ぎ、草の上で昼寝をし・・・まさに夢の牧場の生活をしたのです!

齊藤牧場の牛は全頭角があり、鼻かんもしていません。雄牛も雌牛も混じって群となって行動しています。なので、人工授精をする必要がなく、雌牛達は100%妊娠します。(人の手で妊娠させるのは難しいですが、その苦勞がありません。) 山をスイスイ歩き草をはむその姿は、本来の牛の野性味が感じられました。牛は小柄ながら、丈夫で長い脚を持ち、健康的な蹄で歩きまわります。牛はのろいイメージでみられがちですが、実は山の斜面でもスタスタと歩いていってしまい、

「牛は歩くことが好きなんだ。」

という発見がありました。

山地酪農の利点は、

- ・広い面積を生かした放牧で飼料を買わなくてすむ。(支出が少ない。)
- ・牛は山を歩きまわっているのが健康で免疫力が高い。(病気になりにくい。)
- ・健康ということは牛が長生きする。
- ・エサやりや糞そうじなどの労力が少ない。
- ・牛乳が草の味がする。

などだと思います。(他にもたくさんありますが・・・。)

また、欠点は、

- ・広い土地がないとできない。
- ・牛乳があまり搾れないので、収入が少ない。(ただしエサを買わないので支出も少ない。)
- ・牛乳の中の脂肪分が低いので、乳業メーカーに売ると安くなってしまいます。

などだと思います。山地酪農でも、利点や欠点はちゃんとありますが、私は山地酪農のすばらしさは牛が健康に生き、長生きをすることだと思います。牛が幸せだと人も幸せです。また、欠点の中に乳量が少ない、とありますが、山を歩きまわり山の草で育った牛の牛乳は大変希少だと思います。そこに付加価値をつけ、自分のミルクパーラーを持って牛乳を自分で売ることができたら、それは逆に強みになると思います。斉藤牧場の牛乳は市販の牛乳とはまったく違う山の草の味がするすっきりとしたおいしい牛乳でした。やはり、濃厚飼料でできた牛乳とはまた違った味です。ただ、ミルクパーラーをつくるにはお金がたくさんかかるので課題も残りますが、それでも山地酪農は魅力と可能性がいっぱい詰まった方法です。

私は研修所でたくさんの人々に会いました。私が来る前からいた研修生の方をはじめ、毎日斉藤牧場を全国から訪ねてくる歳も職業も夢も歩いてきた道も違うたくさんの人々に。その仲間と毎日ご飯を作り、夜遅くまで話しました。牛舎での仕事を終え、みんなで研修所へ帰った夜の牧場。こんなに楽しい日々があるなんて！このことは新しい発見であり夢の牧場の大切な要素に加えたいと思いました。また自分が考えていたより“仲間”というものが大切だということに気付くことができ、大切にしていきたいと思いました。

斉藤牧場は研修生を暖かくむかえてくれます。チャンスがある方はぜひ一回行って見て下さい。文の力では伝えきれないすごいものがあそこにはあります。ここで晶さんの言葉を書きたいと思います。

「急いではダメ。ゆっくりやること。チャンスは必ずまわってくる。そして感性を育てることが大切。」

晶さんはよく“感性”が大切、と言っていました。この木は素敵だから切らないでおこう。暑いから日陰を歩いて帰ろう。近道しよう。都会の中の家でも庭にたくさんのお花を咲かせて

---

みんなで楽しむ。私は晶さんの話を聞いて、つまり“感性”とは、

「どんな所でも（たとえそこが一番条件の悪い土地でも）楽しく暮らしていく力」  
だと思いました。私もあせらず色々な世界をみて、感性を育てながら自分らしい生き方をしたいと思います。そう思う私にとって、中央農業高校は大切な学び舎です。高校と言う様々な人が集まり学ぶところは、授業や実習や部活動、人間関係を通して様々なことを学び、考えることができます。将来私は、もし牧場がつくれたら、自分の牛乳を使っておいしいものを作って売りたいと思っていますが、その夢に必要な加工の知識・技術を学べる授業もあります。そして今、酪農部では商品開発をしようと活動していますが、その取り組みの中でものを売るには必ず法律というものが関わってきて、色々やらなければならないことも知りました。授業で学ぶことも、鍬を使い畑をつくることも、酪農部で日々牛を見、管理し感じることも全て私にとって新鮮で、日々新しい発見があり、考えることも多いです。私は中央農業高校に、牛を学ぶことはもちろん、様々な考え方ややり方を学び、考えるため、それから将来の夢に必要な技術を学ぶために通っています。ひとつのやり方・考え方にとられるより、色々な角度でものをみることが自分を豊かにし、新たな考え方やものの見方を創り上げると思います。自分のはじめの気持ち、

「牛も人も幸せな牧場」

を忘れずに、これからの中央農業高校生活を過ごしていきたいです。

---